G-19

アンケート調査による子ども支援の検討

Examination of the child support from questionary survey

森安　和花†　　井上　すず†　　樫地　里奈†　　千田　眞喜子†

Waka Moriyasu　　Suzu Inoue　　Rina Kashiji　　Makiko Senda

1. はじめに

昨今、少子化、核家族化、共働きの増加・一般化、地域社会における人間関係の希薄化などが進行している。その中で、児童虐待（厚生労働省、2020a）、いじめ、不登校、非行などが大きな社会問題となっている。この要因として、家庭や地域の子育ての機能低下があげられている。それに対して、このような社会の情勢において、家庭・地域での“子ども支援”が求められている（厚生労働省、2020b）。

このような背景から子ども支援を検討するために、著者らは 1)「保健室の先生への期待（保健室の先生に求められるもの）」、2) 「絵本の読み聞かせ（子どもにもたらす効果）」、3)「虐待について（被虐待児の社会に出てからの心配ごと、虐待の発見時の対応）」の 3 つのテーマに着目した。本稿では、その 3 つのテーマに沿ったアンケート調査の結果を述べる。

2. 研究の流れ

テーマごとに自由記述のアンケート調査を行った。対象者はA大学の学生と保護者で、前者は留め置き法で、後者は LINE を用いた。アンケート文と人数を**表 1** に示す。

その自由記述の回答をテキストデータ化し、KH coder

表 1　児童支援の３つのテーマごとのアンケート文と人数

テーマ	アンケート文	人数
保健室の先生への期待（保健室の先生に求められるもの）	あなたが思うことを自由に書いてください。 保健室の先生が、看護師ではなく、 養護教諭であることの利点と欠点についてどう考えますか？ 利点　保健室の先生が看護師ではなく養護教諭であると （　　）だから、良いと考える。 欠点　保健室の先生が看護師ではなく養護教諭であると （　　）だから、良くないと考える。	学生: 67 人、 保護者: 10 人
絵本の読み聞かせ（子どもにもたらす効果）	問 1. 絵本の読み聞かせは子どもの成長に大きく関わると思いますか？ はい・いいえ 問 2. その理由を教えてください。 （　　） 問 3、4 はどちらかに答えてください。 問 3. 実習期間で絵本の読み聞かせをする機会があった人 ・絵本を選ぶときに気をつけたポイントを教えてください。 （　　） 問 4. 実習期間で絵本の読み聞かせをする機会がなかった人 ・自分が絵本の読み聞かせをするなら、絵本を選ぶときに気をつけようと思うポイントがあれば教えてください。 （　　）	学生: 64 人
「虐待について（被虐待児の社会に出てからの心配ごと、虐待の発見時の対応）	虐待～その後に起こりうる障害～ 質問は全部で三つあります。貴方が思うことを自由に書いてください。 問 1. 貴方の知っている虐待について教えてください。 （興味がない、わからない場合は無記入でお願いします。） 問 2. 過去に虐待を受けた子どもがその後どのような生活を送るか、また社会にでた際の衝突する壁はなんだと考えますか。 （興味がない、わからない場合は無記入でお願いします。） 問 3. もし、自分の身の回りで虐待を疑う子どもを発見した場合貴方ならどうしますか？ （興味がない、わからない場合は無記入でお願いします。）	学生 101 人

†花園大学、 Hanazono University

（樋口、2014）を用いてテキストマイニングによる内容分析を行った。茶筌（奈良先端奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座（松本研究室）、2020）を用いて、文章を形態素分析により一語一語に分けて、前処理を行った。次に、「総抽出語数」、「使用総抽出語数」、「異なり語数」、「使用異なり語数」、「抽出語の出現回数の平均」、「抽出語の出現回数の標準偏差」を求めた。「総抽出語数」とは分析対象ファイルに含まれるすべての語の延べ数で、「使用総抽出語数」とは「総抽出語数」から助詞や助動詞を除外した数である。「異なり語数」とは何種類の語が含まれているかを示す数で、「使用異なり語数」とは「異なり語数」から助詞や助動詞を除外した数である。

頻出語について検討した後、共起ネットワーク図を作成し視覚的に検討した。共起ネットワークでは、出現回数が多い語ほど円が大きく、線と線で結ばれている語は関連性が強くなる。また、円の位置や近さには意味はない（樋口、2014）。

なお、アンケート対象者は、本研究への協力に同意した方とした。回答は任意で、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないこと、無記名なので回答者個人を特定しないものであること、研究の目的以外には使用しないことを口頭と文書で説明し、了承を得た。

3. 結果・考察

子ども支援に関して、次の３つのテーマごとに検討する。3.1 で「保健室の先生への期待（保健室の先生に求められるもの）」、3.2 で「絵本の読み聞かせ（子どもにもたらす効果）」、3.3 で「虐待について（被虐待児の社会に出てからの心配ごと、虐待の発見時の対応）」についてアンケートの結果を示し、子ども支援について考察する。

3.1 保健室の先生への期待（保健室の先生に求められるもの）

まず、「保健室の先生への期待（保健室の先生に求められるもの）」に関しては、(1)で看護師と比べて養護教諭であることの利点について、(2)で前者に比べ後者の欠点について分けて検討する。

（1）看護師と比べて養護教諭であることの利点

1.データの概要

記述統計の結果、総抽出語数は 830、使用総抽出語数は 373、異なり語数は 180、そのうち解析に用いた使用異なり語数は 136 であった。文の数は 79、段落は 77 であった。出現回数の平均は 2.74、出現回数の標準偏差は 4.53 であった。

2. 分析結果・考察

頻出語リストを**表 2** に示す。もっとも多く使われた語は「ケア」（25 回）だった。また、ケガ（9 回）より「心」（20 回）や「精神」（10 回）のほうが多かった。これらの結果から、看護師と比べて養護教諭であることの利点として、“ケガのケア”より“心のケア”が重要視されていた。

図 1 に利点の語と語の共起ネットワーク図を示す。語数 41、共起関係 74 であった。 看護師ではなく養護教諭であることの利点に関しては、1 つのグループになった。

「ケア」、「心」という言葉が最も多く使われ、共起線で結ばれていることから、看護師に比べ養護教諭の１つ目の利点は、「“心のケア”ができること」である。また、「立場」に共起線が多いことより、２つ目の利点は、「多様な立場」である。養護教諭は、児童の教育や心身の健康サポートにかかわる立場でもあり、また気軽に話しかけることができる立場である。

次に、利点に関して、学生と保護者に分けて、共通で使われた語と単独に使われた語に分けて解析した。**図 2** に語と属性（学生と保護者）の共起ネットワーク図を示す。利点と考える学生と保護者の多く使われた共通語は、「ケア」、「心」、「子ども」であった。学生単独で多く使われた語は、「精神」、「寄り添う」、「寄り添える」、「見る」などであった。保護者単独で使われた語は、「情報」、「サポート」のみであった。利点に関しては、共通語も多いが、単独で使われた語もあり、学生と保護者の違いが明らかになった。学生は感情・悩みに関することを利点と考え、保護者は情報面のサポートを利点とすることが特徴であった。

表 2　看護師と比べて養護教諭であることの利点についての頻出語リスト

頻出語	出現回数
ケア	25
心	20
子ども	17
精神	10
ケガ	9
教育	9
相談	7
見る	6
心理	6
知識	5
保健	5
面	5
学校	4
寄り添う	4
気軽	4
健康	4
身近	4
身体	4
生徒	4
病気	4
立場	4
話す	4

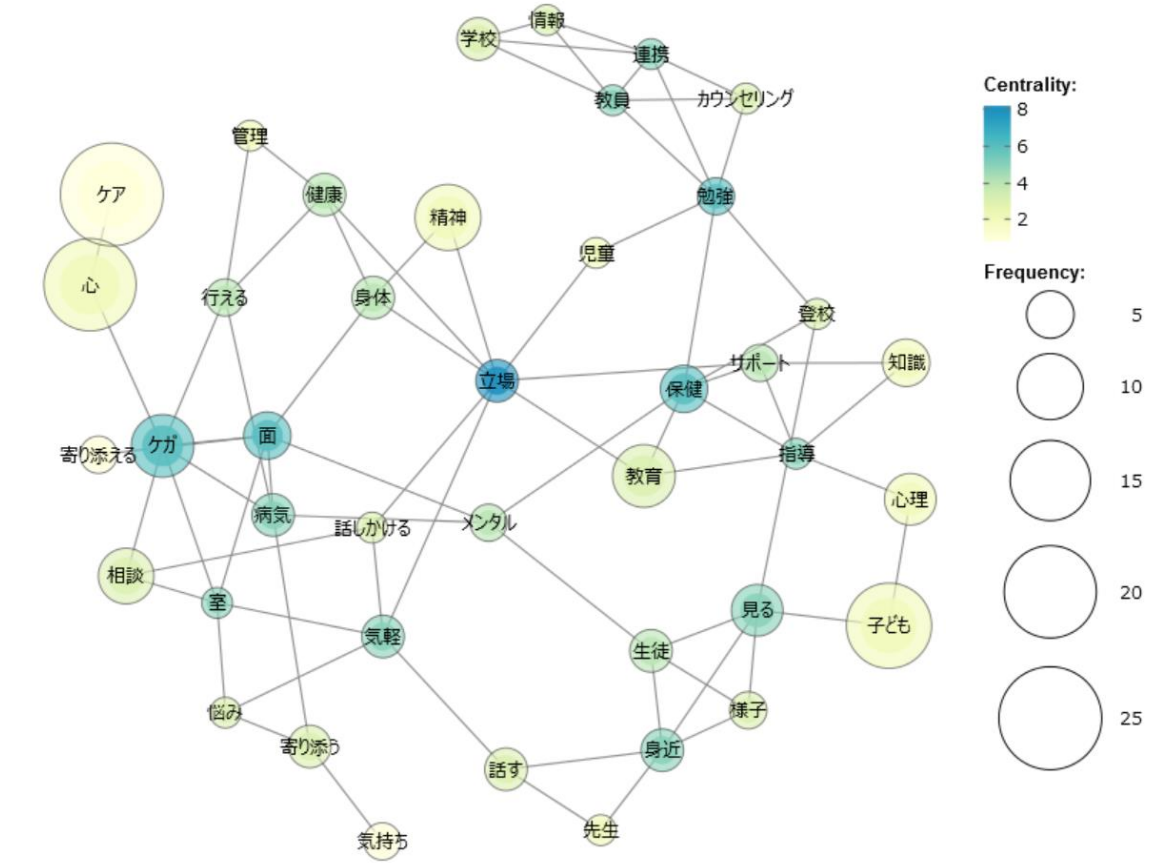

図１　看護師と比べて養護教諭であることの利点についての語と語の共起ネットワーク（次数中心性）

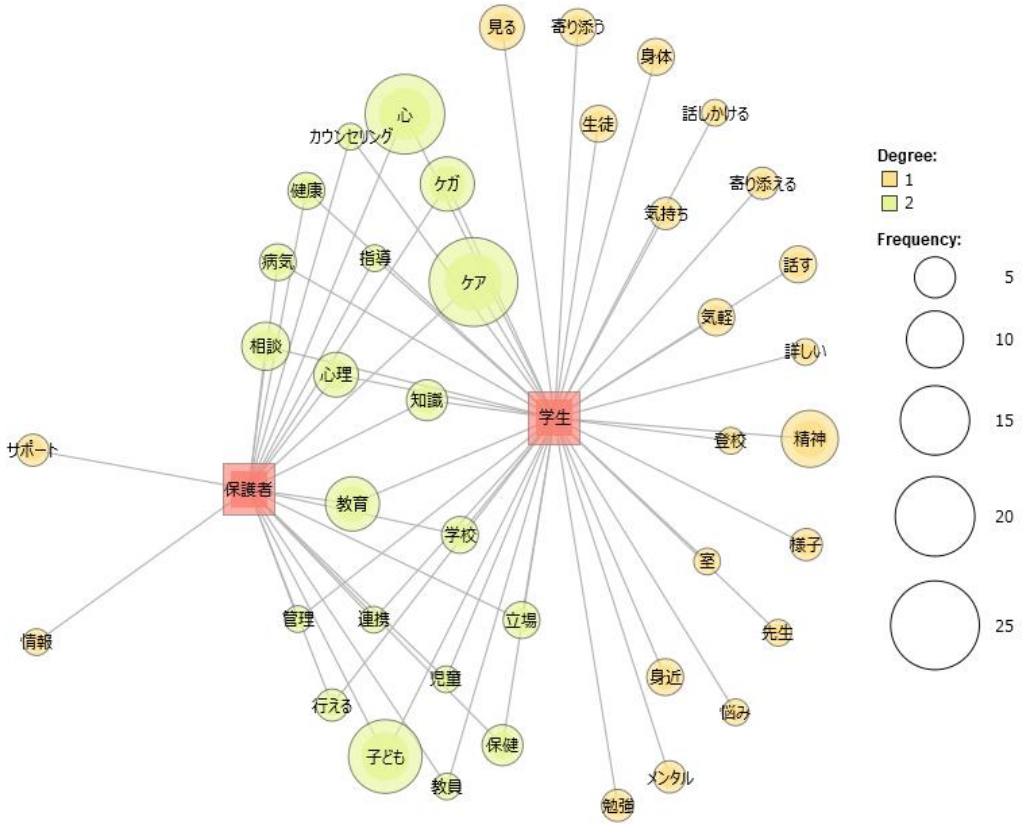

図２　看護師と比べて養護教諭であることの利点についての語と属性（学生と保護者）の共起ネットワーク

(2) 看護師と比べて養護教諭であることの欠点について

1.データの概要

総抽出語数は 713、使用総抽出語数は 351、異なり語数は 164、そのうち解析に用いた使用異なり語数は 114 である。出現回数の平均は 3.08、出現回数の標準偏差は 5.03 であった。

2. 分析結果・考察

頻出語リストを**表 3** に示す。上位頻出語の結果から、もっとも多いのは「知識」で 19 回、次に多いのは「処置」で 16 回であった。これらの結果から、看護師を比べ養護教諭の欠点は、医療的な知識が足らないことや処置ができないことである。

図 3 に欠点の共起ネットワーク図を示す。語数 32、共起関係 60 であった。看護師ではなく養護教諭であることの欠点に関しては、２つのグループに分かれた。

大きいほうのグループの共起ネットワークでは、利点に比べて、「知識」「看護」「医療」などの、言葉が頻出であり、つながりが多かった。この結果から、看護師に比べ、養護教諭であることの欠点は、「医療的・看護的・専門的な知識が少なく不安であること」と示された。

小さいほうのグループでは「処置」、「応急」の語が共起線でつながっていた。そこで、欠点は、「応急処置に対する不安」であると解釈される。

表 3　看護師と比べて養護教諭であることの欠点についての頻出語リスト

頻出語	出現回数
知識	19
処置	16
医療	12
看護	12
専門	10
ケガ	9
少ない	8
応急	7
治療	6
詳しい	6
判断	6
手当て	5
病気	5
緊急	4
対応	4
適切	4
劣る	4

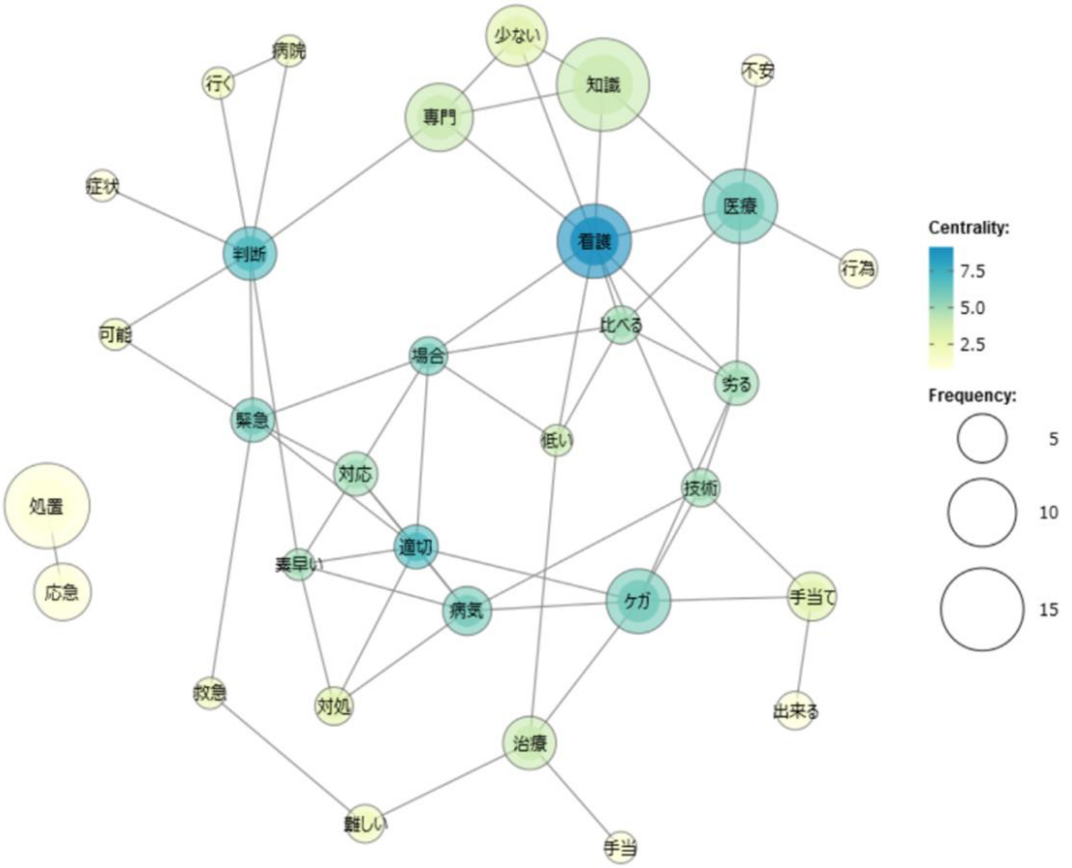

図 3　看護師と比べて養護教諭であることの欠点についての語と語の共起ネットワーク（次数中心性）

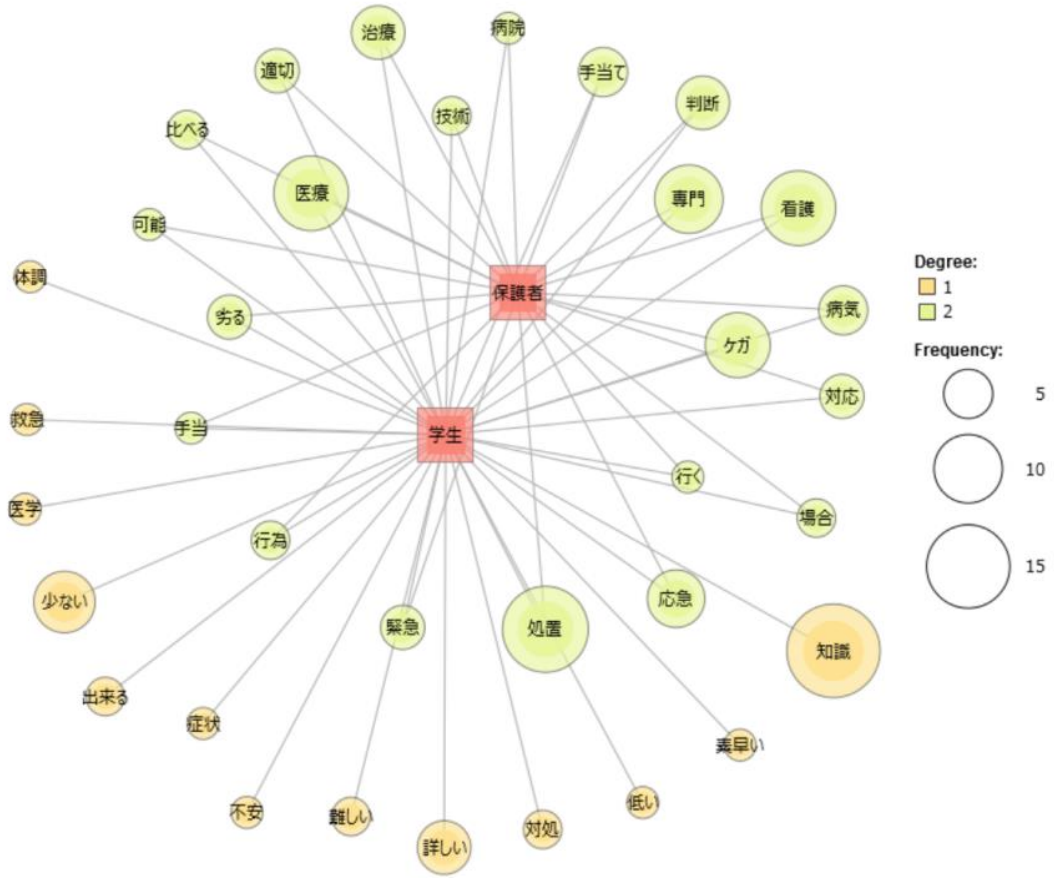

図 4　看護師と比べて養護教諭であることの欠点についての語と属性（学生と保護者）の共起ネットワーク

次に欠点に関して、学生と保護者に分けて、共通で使われた語と単独に使われた語に分けて解析した。**図 4** に看護師と比べて養護教諭であることの欠点についての語と属性（学生と保護者）の共起ネットワークを示す。

欠点と考える学生と保護者の多く使われた共通の語は、「医療」、「処置」、「看護」、「専門」などであった。学生単独で多く使われた語は、「知識」、「少ない」などの語だった。保護者は、学生と共通のみで単独の語はなかった。学生も保護者も、医療的・看護的・専門的な処置に関しては、看護師のほうが養護教諭より優れていると考えていた。

3.2　絵本の読み聞かせ（子どもにもたらす効果）

ここでは、絵本の読み聞かせ（子どもにもたらす効果）に関して、（1）で問 1「絵本の読み聞かせは子どもの成長に大きく関わると思うか」、（2）で問 2「子どもの成長に大きく関わる理由」、(3)で問 3、問 4「絵本を選ぶ時のポイント」に分けて検討する。

（1）絵本の読み聞かせは子どもの成長に大きく関 わると思うか」

問 1 に対して、64 名中 63 名が「はい」と答えた。98%が絵本の読み聞かせが子どもの成長に大きく関わると考えていた。

（2）子どもの成長に大きく関わる理由

1.データの概要

総抽出語数は 600、使用総抽出語数は 273、異なり語数は 150、そのうち解析に用いた使用異なり語数は 111 であった。出現回数の平均は 2.46 であった。

2. 分析結果・考察

頻出語リストを**表 4** に示す。頻出語の結果から、「想像」（26 回）が最も多く、次に「思う」（12 回）、「豊か」（10 回）、「絵本」（9 回）、「言葉」（9 回）、「絵」（8 回）の順に多く使われていた。回数は少ないが、「感情」や「文字」などもあった。学生は、絵本が子どもの成長に大きく関わり、絵本の読み聞かせを行うことで子どもの想像力が豊かになると考えている人が多かった。

図 5 に絵本の読み聞かせが子どもの成長に大きく関わる理由について、語と語の共起ネットワークを示す。共起ネットワークは 2 つのグループに分かれた。

大きいほうのグループの共起ネットワークより、絵本の読み聞かせが子どもの成長に大きく関わる理由として次の 2 つのことがわかった。1 つ目は、子どもの想像力や表現力が豊かになること、2 つ目は、絵本で言葉に触れ、覚えることで感情豊かになり、

表 4　子どもの成長に大きく関わる理由についての頻出語リスト

頻出語	出現回数
想像	26
思う	12
豊か	10
絵本	9
言葉	9
絵	8
子ども	8
表現	5
感情	4
機会	4
文字	4

世界が広がることである。つまり、理由は「絵本は感性領域の成長に役立つこと」である。

小さいほうのグループの共起ネットワークからは、求めた理由は文字を学べることであった。つまり、理由は「絵本は勉強領域の成長にも役立つこと」である。

(3)　絵本を選ぶ時のポイント

1.データの概要

総抽出語数は 528、使用総抽出語数は 255、異なり語数は 137、そのうち解析に用いた使用異なり語数は 93 であった。出現回数の平均は 2.74 であった。

2.分析結果・考察

頻出語リストを**表 5** に示す。頻出語の結果から、「年齢」（28 回）が最も多く、次に、「合う」（15 回）、「本」（15 回）、「子ども」（14 回）、「内容」（12 回）、「絵本」（10 回）と多かった。

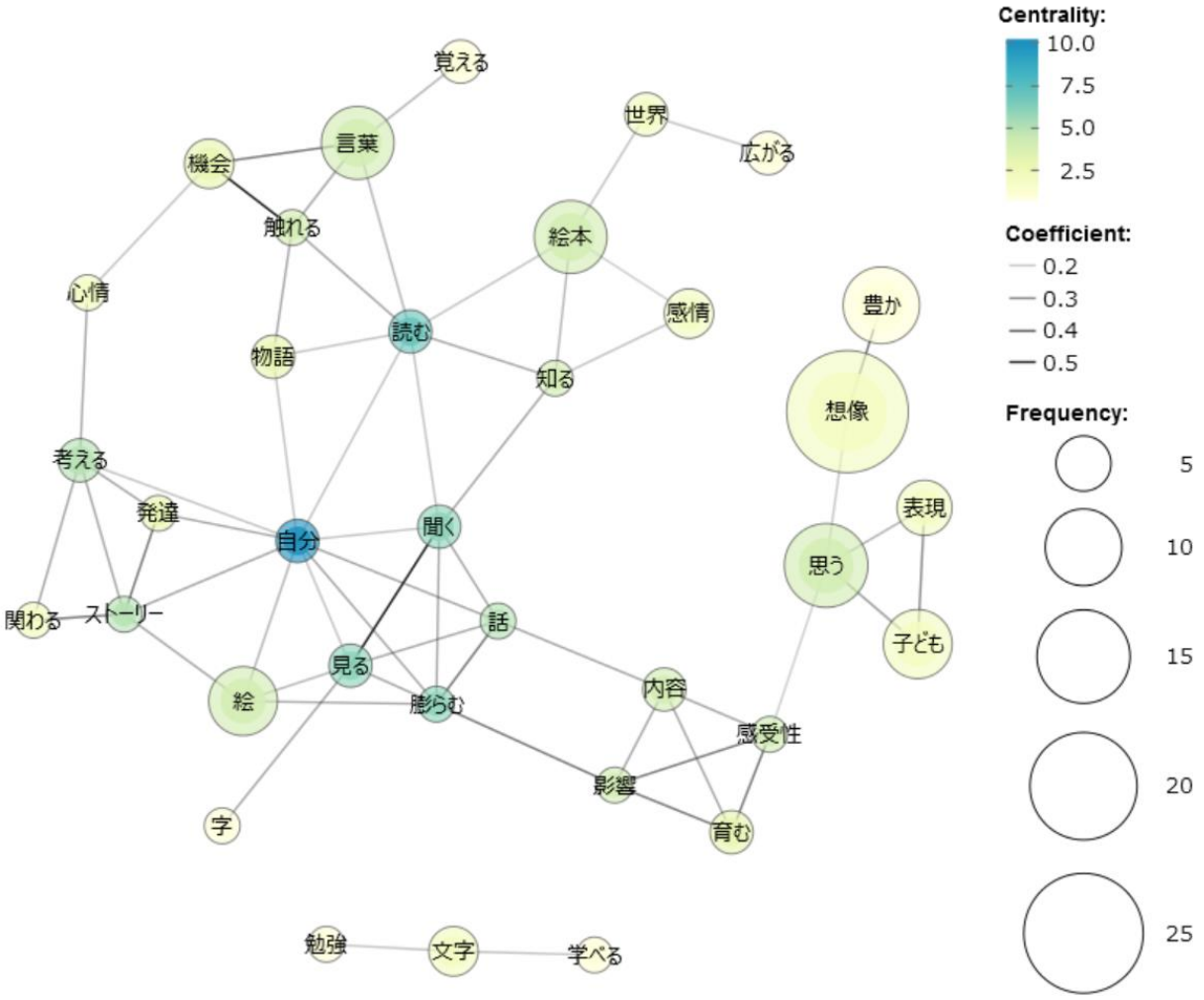

図 5　絵本の読み聞かせが子どもの成長に大きく関わる理由についての語と語の共起ネットワーク（次数中心性）

表 5 絵本を選ぶ時のポイントについての頻出語リスト

頻出語	出現回数
年齢	28
合う	15
本	15
子ども	14
内容	12
絵本	10
季節	9
読む	8
絵	5
興味	5

図 6 に学生の考える絵本を選ぶポイントについての語と語の共起ネットワークを示した。「学生が絵本を選ぶときに気をつけているポイント」は、次の３つと考えられる。１つ目は、「子ども」の「年齢」に「合う」こと、２つ目は「子ども」の「興味」を引きそうなこと、３つ目は「季節」や「行事」に「合う」ことである。

3.3 虐待について

虐待に関しては、（1）で問 1「知っている虐待は何か」、（2）で問 2「被虐待児の社会に出てからの心配ごと」、（3）で問 3「虐待の発見時の対応」について検討する。

（1）知っている虐待は何か

1.データの概要

総抽出語数は 1,159、使用総抽出語数は 416、異なり語数は 110、そのうち解析に用いた使用異なり語数は 79 であった。文の数は 204、段落は 98 であった。

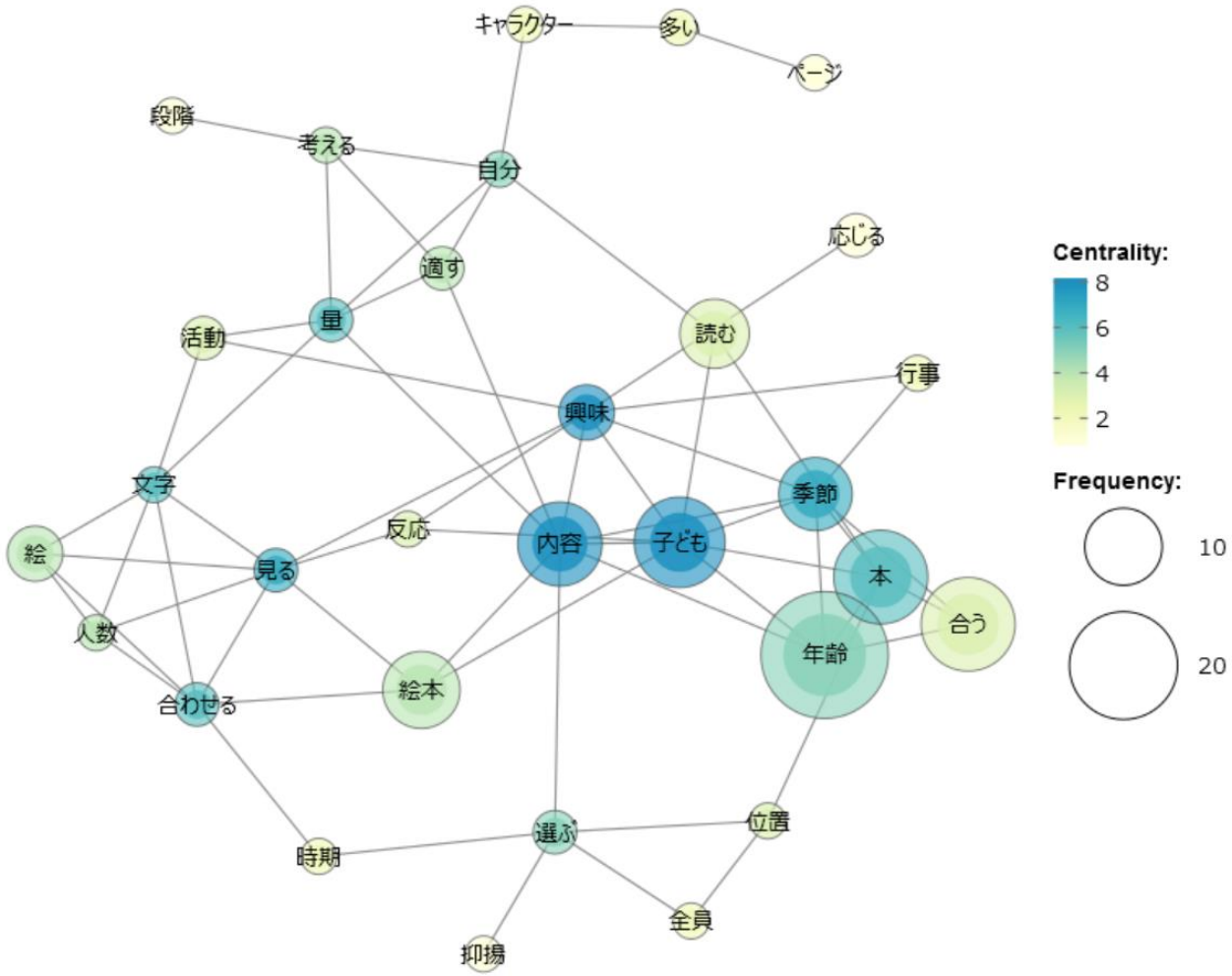

図 6　絵本を選ぶポイントの語と語の共起ネットワーク（次数中心性）

表 6　知っている虐待は何かについての頻出語リスト

頻出語	出現回数
虐待	72
身体	43
性的	43
ネグレクト	34
心理	28
精神	27
暴力	17
児童	15
DV	9
蹴る	8
殴る	7

2.分析結果・考察

まず、頻出語リストを**表 6** に示す。頻出語の結果から、最も多い語は「虐待」（72 回）、次に多いのは「身体」と「性的」（43 回）であった。虐待のイメージとして身体的虐待と性的虐待が多いことが分かった。虐待を表す際に、“具体的な行為名”で表すよりも“代表的な虐待名”で表すことが分かった。

次に、知っている虐待は何かについての語と語の共起ネットワークを**図 7** に示す。語数 25、共起関係 60 であった。２つのグループに分かれた。

１つ目の大きいほうのグループには、「虐待」、「ネグレクト」、「心理」、「身体」、「性的」が多く、共起関係もあった。少数ではあるが、高齢者への虐待についても書かれていた。具体的な虐待行為よりも、様々な“代表的な虐待名”を回答していた。

２つ目の小さいほうのグループは、「北海道」と「事件」の語のみであった。これは札幌の２歳児衰弱死の事例（朝日新聞デジタル、2019）を指している。

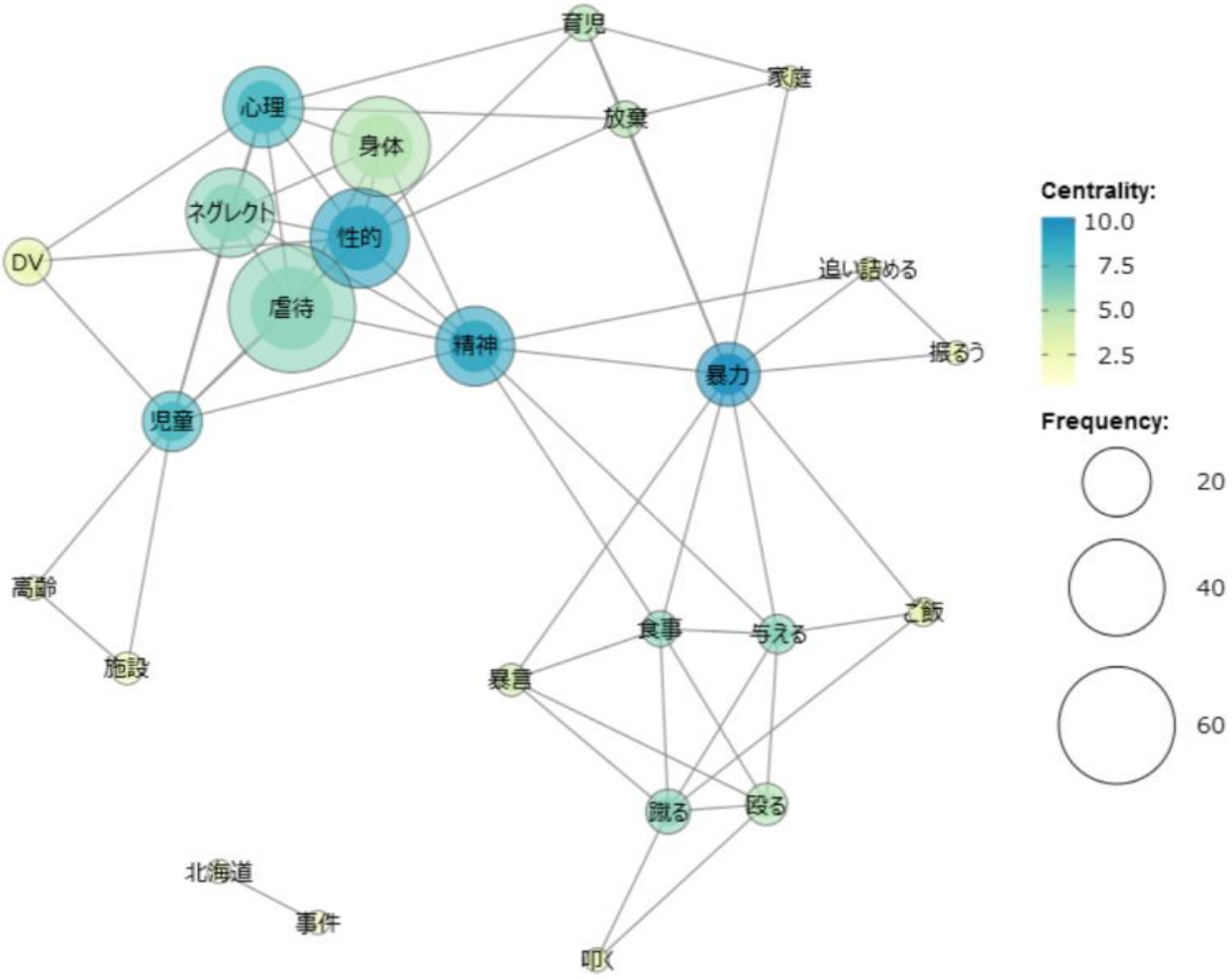

図 7　　知っている虐待は何かについての語と語の共起ネットワーク（次数中心性）

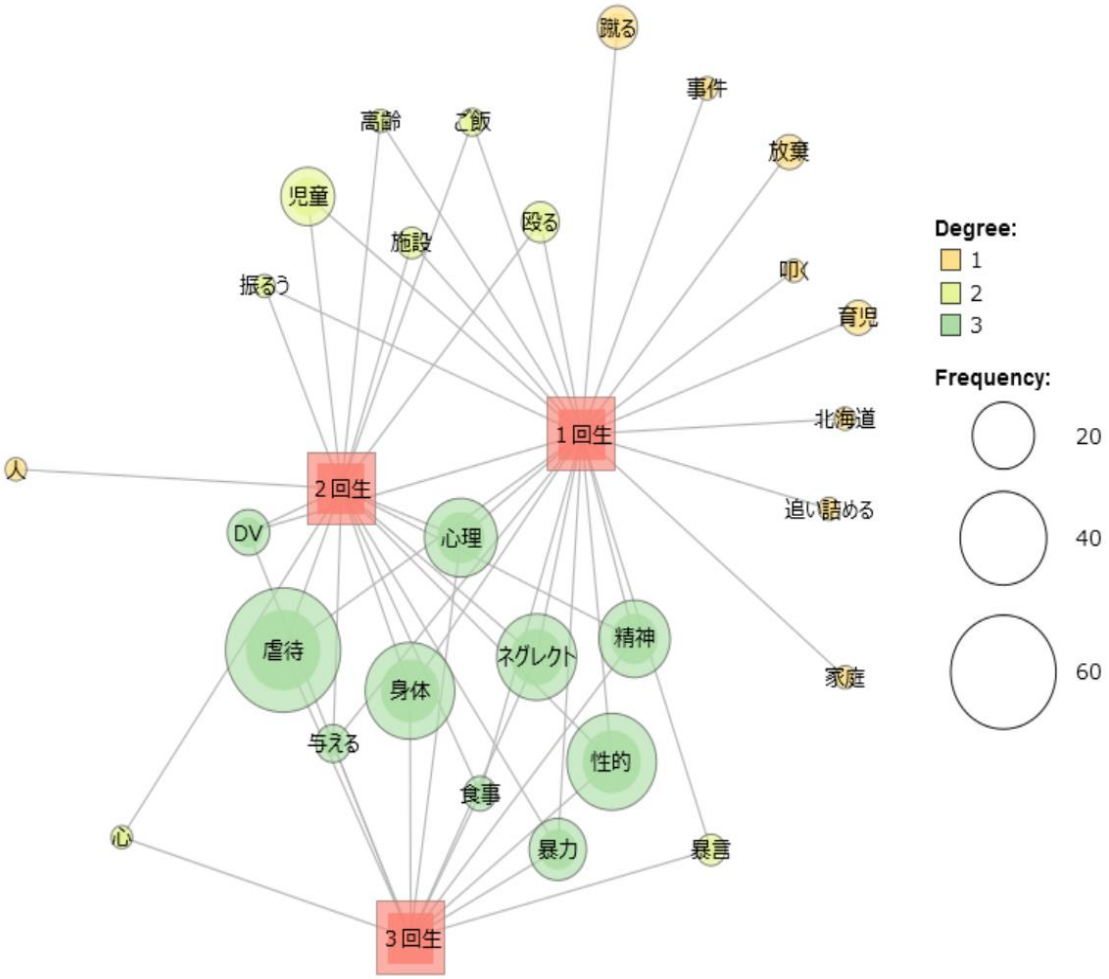

図 8 知っている虐待は何かについての語と属性（1回生、2回生、3回生）の共起ネットワーク

また、知っている虐待は何かについての語と属性（１回生、２回生、３回生）の共起ネットワークを**図 8** に示す。１、２、３回生で多く使われた共通語は、「身体」、「性的」、「ネグレクト」、「心理」などであった。１、２回生の共通語は、「児童」、「殴る」、「施設」などだった。１、３回生の共通語は、「暴言」のみで、２、３回生の共通語は、「心」のみだった。

１、２、３回生の共通語は、多く使われた語でもあり、上級生ほど共通語が多く、虐待の全体像を示す“虐待名”が多い傾向が見られた。1 回生は北海道の虐待のニュースなどの“特定の事例”に興味を示している傾向が見られた。

(2) 被虐待児の社会に出てからの心配ごと

1.データの概要

総抽出語数は 872、使用総抽出語数は 427、異なり語数は 222、そのうち解析に用いた使用異なり語数は 163 であった。出現回数の平均は 2.62、出現回数の標準偏差は 4.15 であった。

2.分析結果・考察

頻出語リストを**表 7** に示す。１番多い語は「人間」（17 回）で、次に多い語は「施設」（15 回）であった。他の上位頻出語の「人」や「関係」（13 回）、「不信」（9 回）、「愛着」（8 回）、「トラウマ」（7 回）も含めて検討すると、これからの

表 7 被虐待児の社会に出てからの心配ごとについての頻出語リスト

頻出語	出現回数
人間	17
施設	15
関係	13
人	13
自分	10
不信	9
愛着	8
トラウマ	7
虐待	7
子ども	7
障害	6
信用	6
生活	6
怖い	6

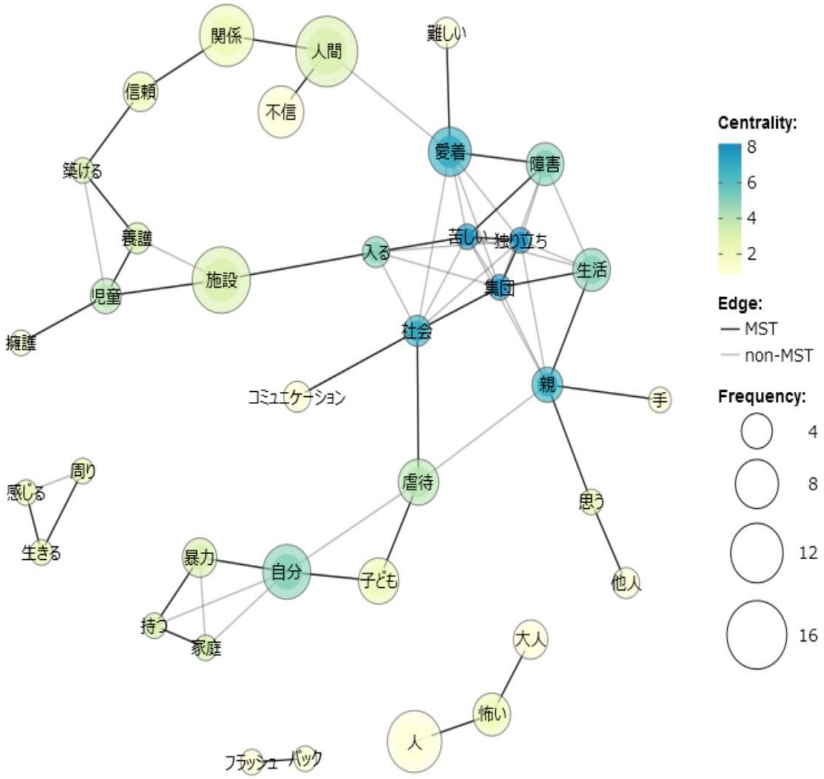

図 9　被虐待児の社会に出てからの心配ごとについての語と語の共起ネットワーク（次数中心性）

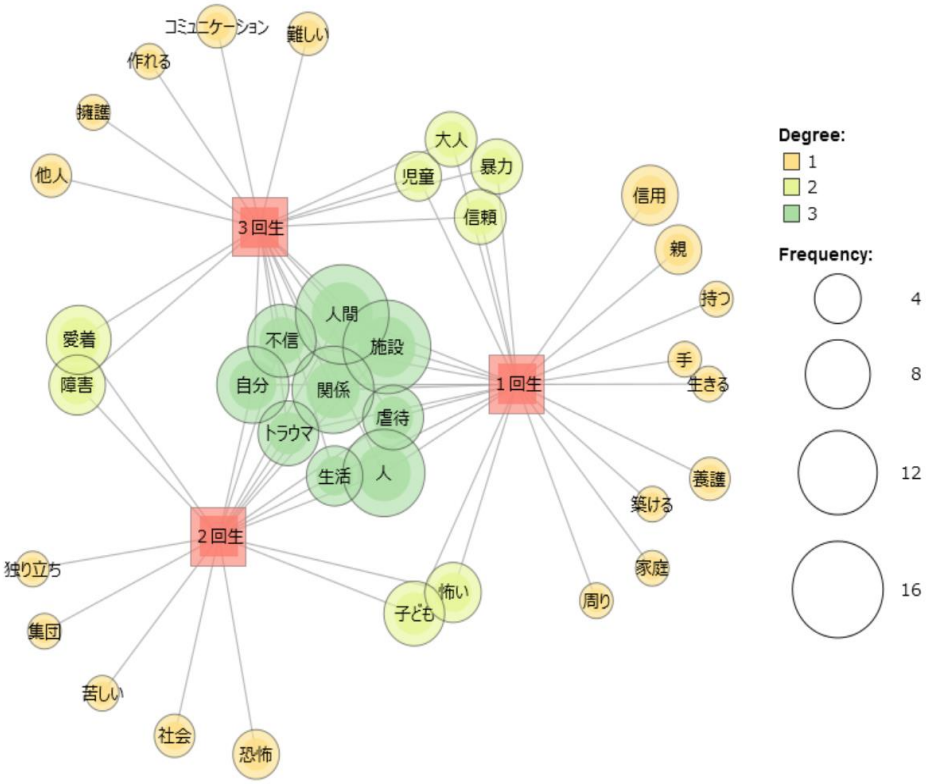

図 10　被虐待児の社会に出てからの心配ごとについての語と属性（１、２、３回生）の共起ネットワーク

生活の壁として人間関係に不信感が多く、トラウマになると危惧していることがわかった。

図 9 に被虐待児の社会に出てからの心配ごとについての語と語の共起ネットワークを示す。語数 37、共起関係 60 であった。被虐待児の社会に出てからの心配ごとは、４つのグループに分かれた。

まず、最も大きいグループにおいて上位頻出語の「人間」、「関係」、「施設」、「愛着」、「不信」の語と共起線から検討した。被虐待児の社会に出てからの心配ごとは、これからの生活の壁として人間関係に不信感が多く、トラウマになると危惧していることがわかった。

他の３つのグループからは、心配ごとは、フラッシュバック、対人恐怖、周りが気になりながら生きることと解釈された。

図 10 に被虐待児の社会に出てからの心配ごとについての語と属性（１、２、３回生）の共起ネットワークを示す。回生別に分けて、共通語について考察した。まず、１、２、３回生で共通で多く使われた語は、「人間」、「関係」、「不信」、「トラウマ」などで、人間関係というキーワードに注目が集まっていた。１、２回生の共通語は、「子ども」、「怖い」のみであった。１、３回生の共通語は、「大人」、「児童」、「暴力」、「信頼」だった。２、３回生の共通語は、「愛着」、「障害」だった。学年が進むにつれて、専門用語が出る傾向が見られた。

表 8　虐待の発見時の対応についての頻出語リスト

頻出語	出現回数
相談	69
児童	21
警察	17
通報	15
周り	9
連絡	9
人	7
先生	7
大人	7
話	6
児	4
通告	4
電話	4
機関	3
自分	3
助ける	3
信頼	3
身近	3
専門	3

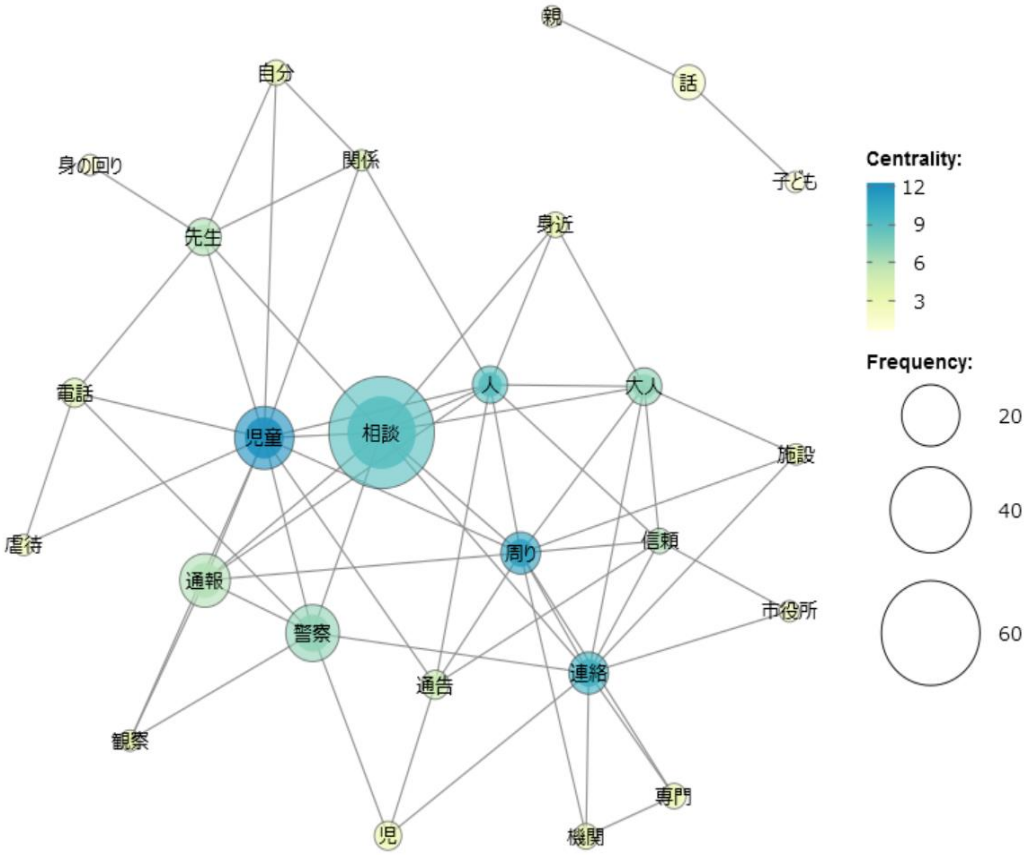

図 11　虐待の発見時の対応についての語と語の共起ネットワーク（次数中心性）

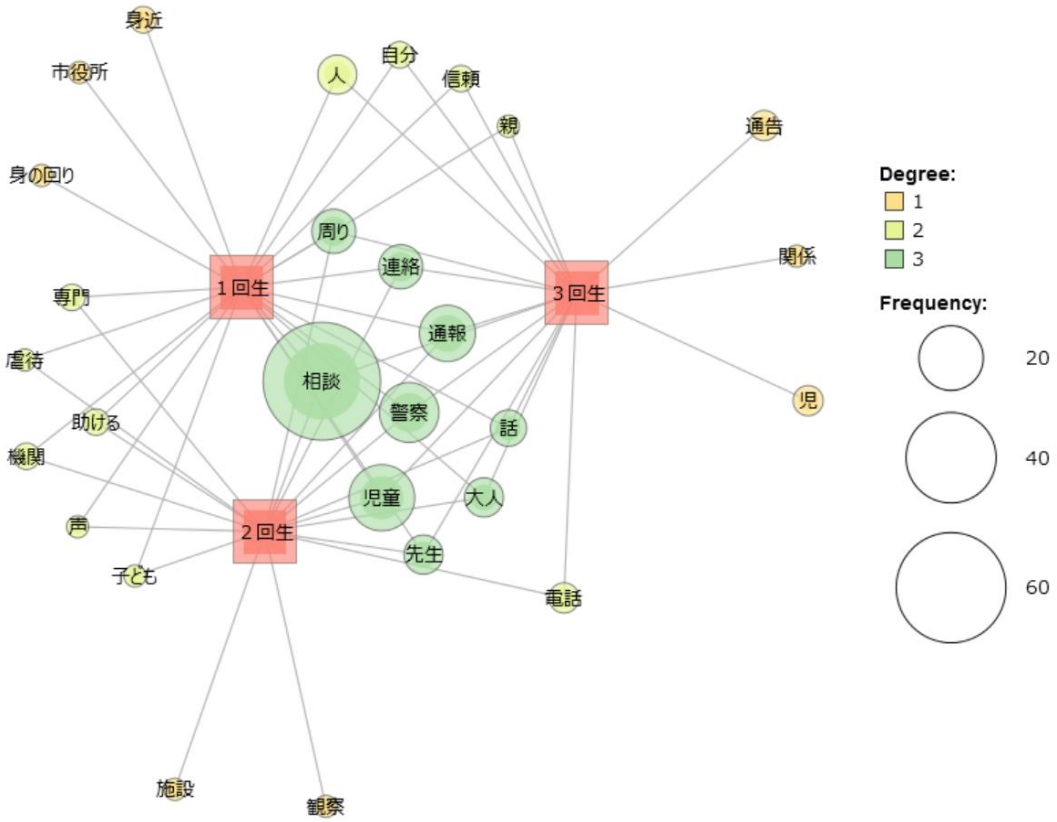

図 12　虐待の発見時の対応についての語と属性（１、２、３回生）の共起ネットワーク

(3) 虐待の発見時の対応

1.データの概要

総抽出語数は 955、使用総抽出語数は 321、異なり語数は 130、そのうち解析に用いた使用異なり語数は 86 である。文の数は 207、段落は 98 であった。出現回数の平均は 3.73、出現回数の標準偏差は 8.52 であった。

2.分析結果・考察

虐待の発見時の対応について頻出語リストを**表 8** に示す。頻出語の結果、出現回数が一番多いのは「相談」（69 回）であった。 次に「児童」（21 回）、「警察」（17 回）、「通報」であった。自分で助けるという意見よりも誰かに相談や通報するという意見の方が圧倒的に多い。また、専門機関や警察を頼るという意見が多い。

図 11 に虐待の発見時の対応についての語と語の共起ネットワークを示す。語数 26、共起関係 63 であった。２つのグループに分かれた。大きいほうのグループから、虐待を発見したときは「相談する」が最も多かった。つまり、自分で助けるよりも、専門機関や警察、周りに相談や通報すると考えていることがわかった。小さいほうのグループからは、子どもと親とが話し合う対応が示された。

図 12 に虐待の発見時の対応についての語と属性（１、２、３回生）の共起ネットワークを示す。

１、２、３回生の共通語は、「相談」、「警察」、「大人」だった。このことから周りに相談する対応を示していた。１、２回生の共通語は、「専門」、「機関」だった。つまり、専門機関により助けてもらう対応であった。１、３回生の共通語は「親」、「信頼」、「人」、「自分」だった。これは、“自分が頼る人”を示していた。２、３回生の共通の語は、「電話」のみだった。これは電話での対応を示していた。

心配ごとと同様に、対応についても回生が進むと専門用語が増える傾向だった。

4. 総括

子ども支援について「保健室の先生への期待」、「絵本の読み聞かせ」や「虐待」に着目し、アンケート調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

1) 保健室の先生には、心のケアが最も求められた。
2) 絵本の読み聞かせは、子どもの成長に大きく関わる。
3) 被虐待児の社会に出てからの人間関係が最も心配で、虐待の発見時には、自ら救助するより誰かに相談する傾向が見られた。

5. 今後の課題

今後はこれらの結果も踏まえ、子ども支援の具体的な対策について検討する。また、コロナ禍における子ども支援の対応方法も課題として進めていきたい。

6. 参考文献

朝日新聞デジタル（2019）、２歳女児死亡、日常的な虐待か　傷害容疑で母親ら逮捕、2019/6/6、https://www.asahi.com/articles/ASM663K6CM66IIPE003.html （参照日：2020/07/02）.

藤井寿美子・山口昭子・佐藤紀久榮・采女智津江（2018）、養護教諭のための看護学、大修館書店、pp.13-14、389-40.

樋口耕一（2014）、社会調査のための形容テキスト分析、ナカニシヤ出版、pp.233.

厚生労働省（2020a）、児童虐待防止対策、https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index.html、（参照日：2020/06/18）.

厚生労働省（2020b）、子ども・子育て支援、https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/、（参照日：2020/06/18）.

奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座(松本研究室)、茶筌 ChaSen -- 形態素解析器、http://chasen-legacy.osdn.jp/、（参照日：2020/5/12）.